

Title	日本語数量詞の諸相 : 数量詞の位置と意味の関係を 中心に
Author(s)	岩田, 一成
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/1839">https://hdl.handle.net/11094/1839</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	いわ たり かつなり 岩 田 一 成
博士の専攻分野の名称	博 士(言語文化学)
学位記番号	第 21287 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	日本語数量詞の諸相 —数量詞の位置と意味の関係を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 春木 仁孝 (副査) 教授 岡田 伸夫 助教授 大森 文子

## 論文内容の要旨

### 1. 本論文の目的と考察対象

本論文は日本語数量詞の使用状況や機能を記述することを目的とする。よって数量詞を使用しているあらゆる表現を考察対象とした。言語現象の記述が目的であるが、分析を行なうにあたり、言語を以下のように捉える。

まず、具体的な発話場面における伝達行動として言語を特徴付ける。また、言語表現には人間の経験やものごとの捉え方が反映されていると考える。いわゆる機能的、認知的アプローチで論を進める。本論文で扱う数量詞を使用した表現とは、数量表現と数量表現以外に分けられる。以後この順で考察対象を具体的に見ていく。

まず、数量表現について見ていく。日本語の数量表現に様々な形式があることはよく知られている。『日本語百科大事典』（大修館書店：1988）の「数量の表現」という項（担当：矢澤真人）を見ると、述部以外の数量数詞<sup>1</sup>の出現位置として、以下の四タイプがあげられている。Qは数量詞、Nは名詞、Cは格助詞を表すとして、それぞれのタイプの呼称を（ ）内に記す。

- |                    |         |
|--------------------|---------|
| ① 3人ノ 学生ガ 反対シタ     | (QのNC型) |
| ② 出席シタ学生ノ 3人ガ 反対シタ | (NのQC型) |
| ③ 学生ガ 3人 反対シタ      | (NCQ型)  |
| ④ 学生3人ガ 反対シタ       | (NQC型)  |

これらの使い分けに説明を与えるのが博士論文の中心テーマである。数量詞の研究である以上、数量表現を研究の中心に据えるべきであると考え。一体こんなにたくさんある数量表現を日本人は何に基づいて使い分けるのであろうか。

実際に使用例を集めてみると、数量表現以外にも更なる対象が浮かんでくる。それは以下に挙げるようなものである。

- |                    |         |
|--------------------|---------|
| ⑤ 77キロノ学生ガ転ンダ      | (属性Q)   |
| ⑥ アルトコロニー一人ノ若者ガオッタ | (不定マーカ) |

<sup>1</sup> 本研究では、数量数詞という用語を使わずに、数量詞と呼ぶ。数量詞とは、〔1、2、3…〕などの数詞と〔本、冊、人〕などの助数詞を足したものである。

⑦ (山本、須田、岩田) アノ三人ハドコヘイッタ? (代名詞的用法)

⑤、⑥は形式上①(QノNC型)と同じ形式をしている。しかし、⑤のような例は「体重が77キロの学生」という意味であり、①タイプの表現とは違う。一般に属性Qと呼ばれているものであるが、同じ形式でも数最表現になったり、属性Qになったりするのはどうしてだろうか。また、⑥のように数詞が、「一」のときは、不定マーカ―としての読みなどが出てくる。⑦のように代名詞として数量詞が使われている例も非常に目に付く。これらは、数量詞を用いているにもかかわらず、数量表現ではない。一見周位的と見られがちであるが、これらの表現は日本語における数量詞の使用の大きな部分を占めている。

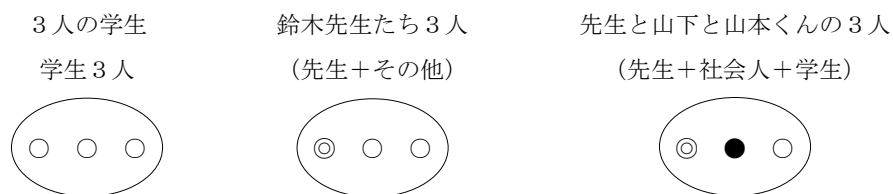
①②③④に関する議論は、数量詞の位置と意味の関係を議論するものであるが、⑤⑥⑦に関するものは数量詞機能の多様性や数に関する議論である。よって、それらさまざまな議論を含んでいることが、『数量詞の諸相』というやや大きなタイトルをつけたゆえんである。

## 2. 日本語数量詞：位置と意味の関係について

本論文の中心テーマである数量表現の使い分けに関して、以下のような主張を行なった。③のNCQ型(「学生が3人 反対シタ」)以外はすべて名詞句内に数量詞があるという共通点を指摘した(第8章)が、NCQ型だけは名詞句を形成せずに、数量詞が名詞(句)の外にあると言える。つまり文レベルで数量詞が焦点化されるのがNCQ型であり、これが数量表現の基本形であるという主張をおこなった(第4章)。これは、数量を伝えるための表現がNCQ型であると言い換えることもできる。

では、QのNC型、NQC型、NのQC型はどうなるのであろうか。これらは名詞句内にあり、かつQがNの全体数を表すところから、集合物認知を表すという共通点が確認できた。つまり、これらはある集合物について叙述する文であると言える。集合物の数がいくつあるのかは二次的な情報となる。この点において数量を伝えるためのNCQ型とは大きく異なる。

名詞句内数量詞の三つの用法については、それぞれ第5章、第6章、第7章で論じた後で、第8章にまとめた。まず、意味的な中心(重点)がNにあるのかQにあるのかでQのNC型かNQC型が使い分けられると主張した。名詞句だけを取り出してQのNとNQを比較すると、数量を焦点化したり、強調したりする文脈にNQが使われることを6章で確認した。次に、意味的な中心の違いから、同質な集合物を要求するQのNC型、異質な集合物を要求するNのQC型、どちらも許容できるNQC型という性格が明らかになった。これは名詞句内数量詞は集合物の均質性によって使い分けられるという主張である。これらの数量表現を用いると、以下のような異なった三つの集団を言い分けられる。



## 3. 日本語数量詞：数量表現以外の使用

日本語の数量詞が数量表現だけでなくさまざまな機能を持つことも扱った。本論文ではそれらを、大きく三つに分けて論じた。一つ目は数量詞の中の助数詞(類別詞)が持つ名詞を分類する機能である。二つ目は代名詞的な機能、三つ目は数詞「一」が持つ特殊な機能である。

第2章において、カテゴリー化という観点で見れば助数詞(類別詞)は名詞を分類する機能を持っており、名詞分類辞やジェンダーなどの共通点が指摘されていることを見た。また、その分類する機能とは、個体を数える機能と連続体の量をはかる機能に2分できることも論じた。それぞれを分類類別詞、測定類別詞という用語で呼び分け、これらの使い分けは個体・連続体という名詞の有界性に関わるという指摘をした。そこでは属性Qの解釈が成立するメカニズムとの関係も論じた。

日本語数量詞が代名詞の代わりに広く使用されていることは本論文の第9章で述べている。照応表現に限らず直示表現でも広く使用が確認された。数量詞の代名詞的用法は、日本語の人称代名詞が持つ制限を補う形で存在している

ということを9章I部で確認した。そこでは、数量詞が抽象的な情報しか持たないことから文脈を頼りに聞き手が指示物を追跡するというプロセスを論じた。そして、直接指示物を特定しないことにより柔軟にさまざまな指示物を表せることを主張した。文脈依存的な使用であることから、個性が低くて聞き手が追跡できない時には場指示語の付加が必要になってくることは9章II部で論じた。

数量表現の数詞を‘一’にすると、数量情報以外の情報が加えられることを見たのが第10章である。その数詞‘一’の特殊性は、‘一’という概念が二つのイメージスキーマを持つということによって説明が可能であると主張した。ある集合を前提とし、その全体を表す要素包含型、集合の中の‘一’を取り出す要素取り出し型、この2タイプによって説明を試みた。要素取り出し型で説明できるとした不定用法は、(1Q)のNC型で表された。興味深いのは、第5章で論じたQのNC型との対照的な振る舞いである。5章では、Nが定表現になることでQが非制限的連体修飾になり、QのNC型が成立しているという主張をおこなった。つまり、数詞を‘一’にするか‘二以上’にするかで定・不定を分けていることになる。ただし、日本語の不定用法は義務的ではない。

#### 4. 名詞が担う情報の普遍性解明に向けて

飯田(2005)では、日本語を含む東アジアの言語には数え方が豊富にある(助数詞がたくさんある)という指摘をした後で、これらの言語の共通点として以下のような特徴を挙げている。

- ①冠詞(英語の“a”や“the”にあたるもの)がない
- ②名詞の複数形がない(あっても文法上の厳しいルールがない)
- ③名詞のジェンダー(男性・女性・中性)が存在しない

これらを飯田は東アジアの言語の“三ナイ特徴”と呼んでいる<sup>1</sup>。本論文では、定・不定の区別には数量表現が関わっている(5章・10章)、名詞の複数形は個体・連続体を区別する有界性を表しており、日本語・中国語ではその機能を数量詞が表している(3章)、ジェンダーや名詞接辞は、数量詞と同じような働きをしている(2章)という主張を各章で行なっている。つまり、日本語のような数量詞類別型言語においては、名詞と数量詞を組み合わせることによって、名詞類別型言語の名詞や冠詞が持つ情報を担っているということになる。本論文は、少なくとも日本語において、英語の冠詞や名詞が持つ機能を数量詞(数詞+助数詞)がある程度担っているということを記述できたと考える。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は日本語の数量詞に関して、名詞と助詞と数量詞相互間の位置関係と意味の関係について論じたものである。本論文では先行研究で扱われていない問題や、これまでの研究が不十分と思われる問題を広く取り上げており、特に数量詞の代名詞的用法や、数量詞「一」の特殊性なども論じていて、数量詞研究に貢献すること大である。ただ、欲を言えば例えば代名詞的用法などについてさらに考索を深めるなど特定の問題を中心に据えるようにすればいっそうインパクトのある論文になったのではないと思われる。数量詞が名詞句内にある三つの形式と、数量詞が名詞句の外に有る形式との違いを数量詞の焦点化によって説明するなど、情報構造的な観点からの分析がなされているが、たとえば、語順と情報構造の対応から言うと「3人の学生がやってきた」などの「Q / NC」型では数量詞は前にあるので焦点化されていないように見えるが、むしろ数量詞がプロファイルされているのではないかという意見も出された。このように、さらなる検討を要する問題も残ってはいるが、全体としては仮説とその検証という手続きで着実な論を展開しており、説得力のある論文になっている。

以上のように、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として十分価値あるものと認める。

<sup>1</sup> 第3章で紹介したとおり、②の複数形と助数詞の相補分布については松本(1993)で詳しく扱っている。③のジェンダーと助数詞の相補関係については井上(1999)でも詳しく論じている。